

学校経営のポイント

教育水準、スポーツ競技力、運動基礎能力

若井 彌一

2002 釜山アジア大会が開催されている。10月6日(第8日)現在では、参加各国の金・銀・銅メダル獲得数(合計)は、第1位・中国が162、第2位韓国が114、第3位日本が106で、ここまです上位3カ国である。

以下、第4位はカザフスタン27であり、第5位・北朝鮮24、第6位ウズベキスタン17、第7位タイ15、第8位シンガポール9、と続いている。経済的疲弊が著しいと言われている北朝鮮が大いに健闘しているとの印象をもたれている方々が少なくないであろう。最終結果は、どのようになるのであろうか。

教育水準は日本・韓国・中国の順だが

ところで、スポーツ大会(オリンピック、世界陸上選手権大会、アジア大会など)が開催されるたびに思うことがある。それは、教育水準とスポーツ競技力との関係はどうなっているのか、ということである。アジアでは、シンガポールの教育水準が比較的高いことについて、おそらく教育研究者の間でそれほどの対立は存在しない。しかし、スポーツ競技大会では、今回に限らず、シンガポールが最上位グループにランキングされたことはない(管見の限りである)。

シンガポールの場合ほど明白でないものの、上位3カ国に限ってみても、教育水準の標準の高さがそのままスポーツ競技力の相対的水準を示すものでないことは、およそ理解できよう。一般的には、高等教育を受ける者(高等教育就学率)がどの程度であるかが、その国の教育水準を示しているとみられており、それが、そのままスポーツ競技力を結果として生み出すものであれば、日本・韓国・中国の順に並ぶことが予想される。実際はその反対である。し

かし、もちろん、教育水準が低いほうがスポーツ競技力が高いなどという結果を生みだしているものではないことは断るまでもないであろう。

運動基礎能力の低下に対する取組みを

オリンピックであれ、アジア大会であれ、その大会で、金・銀・銅のメダルを授与される好成績を出させるかどうかは、きわめて高い水準でのことである。このアジア大会で、北島康介選手が2分9秒97の世界新記録(男子200メートル平泳ぎ)で優勝した。

このような世界新記録の場合は、誰もが「すごい!」と思うのだが、世界新記録でなくても、金・銀・銅レベルの競技力は、国民の平均的なあるいは標準的な競技力のレベルからは格段にかけ離れたレベルのものである。それだけに、メダルに手が届いた選手の努力には惜しみない拍手を送りたいが、メダルの数の多寡のみにナシヨナリストティックな感情にもとづいて一喜一憂する愚は避けたいものである。

アジア大会の最終結果がどうなるかは楽しみの一つとするとして、教育関係者がもっと関心を抱き本腰を入れるべきことは、文科省調査によれば、約10年前に比較して児童・生徒の運動基礎能力(走・跳・投など)が明らかに低下していること、そして、その克服に学校教育がどのように効果的に取り組むかである。選ばれた少数者の競技実績は、多数の国民の健全な運動基礎能力に支えられたものであってこそ、積極的評価が可能である。

(わかい・やいち=上越教育大学教授)

■好評発売中! 資料CD添付/定価2730円■

教職研修'02情報版

今月の新刊案内(10月19日発売) 教育開発研究所刊

新教育課程実践事例集 No.4
通知表工夫・記入事例集

A5判220頁・定価2415円

ピンポイント新教育課程実践 No.4
事件・事故を回避する50のポイント

B5判200頁・定価2500円